

四十余年前の仲人夫人と我が娘



言動が記

べてに時がある（一部略）。

コヘレトの言葉の

すべてに「時」がある

（一年の終わりの「時」に）



されている。

ユダヤ教はイエス・キリストを救い主と認めておらず、今も救い主を待ち望み、旧約聖書のみを聖書とする。キリスト教はイエス・キリストこそが救い主であり、旧約の預言がキリストによって成就したとして、旧約、新約の両方を聖書とする。

先日、四十九年前に結婚した際の媒酌人夫人が亡くなられた。九十八歳だった。息子さんによると、亡くなる前に自分で「昇天大満足、御世話になりました。皆様の御仕合せを御祈り致します。ではこれにて、さようなら」と書き残されたという。

「好機幸齢者」として生きようと年賀状に加筆した。確かに体力は衰え、病気がちだ。しかし若いころにはないチャンスが与えられ、幸福な年齢であると思うことこそが幸福への「時」を歩むことになるだろうと…。

最終章に、この書は次のように結ばれている。「すべてに耳を傾けて得た結論。神を畏れ、その戒めを守れ。これこそ人間のすべての義務」と。すべてに時がある。一人々々に異なる時がある。一年間、有り難うございました。どうぞ良き「時」を迎えられますように。

聖書は旧約聖書と新約聖書からなる。旧約はユダヤの民が救い主（メシア）を待ち望む歴史の書である。一

「創世記」に始まる旧約聖書は量的にも新約の四倍もあり、歴史的背景の知識がなければ理解しにくいところもある。私はまだ全編を読んだことはない。それでも含蓄のある言葉に出会う。「すべては空しい」と始まる「コヘレトの言葉」の書が好きだ。第三章の「すべてに『時』がある」もその一つ。

生まれる時があり、死ぬ時がある。泣く時があり、笑う時がある。黙る時があり、話す時がある。すべてに時がある（一部略）。

先日、後期高齢者保険証が送られて来た。七十五歳になると誰もがこの制度に加入するという。そんな時を迎えたのだと自覚するとともに、しばらく考え

「時」を学ぶ。今、自分にとってどんな「時」かを識別し、それを受け入れる…それこそが巡礼の道だとも思う。

出たのでクリスマス



キリストの生誕から西暦が始まる